第一話

堕

俺は、ヒトでなしなんだそうだ。
妻が言っていたのだから間違いあるまい。いや、あの人はもう妻ではない。
前妻――というと、まるで次がいるかのようだし、別れた妻というのも違う気がする。別れる前は妻だったのだけれど、今はもう他人だ。
物凄く遠くにいる他人だ。
――妻だった人、か。
もっと遠いような気がするけれど。
そんなことを考える。
他人だ。無縁だ。もう無関係なのだ。
無関係な人間に言われたと思った途端、無性に肚が立った。ヒトでなしって何だよ。人間じゃないというのかよじゃあ犬かよ虫かよクソかよ巫山戯るなよ馬鹿野郎――。
大きく息を吐いて、夜天を見上げた。
――乎もう如何でも好い。
憤りはすうと抜けた。
何だか、何かが眼に染みる。

息を吸うと鼻腔から瑞瑞しい気体が侵入して来て、肺を満たした。
噎せた。
肋間が痛い。体が重たい。ずっと空気が湿っているような気がしていたのだが、どうも霧雨が降っているらしい。降っているというより、舞っているといった方が近いか。重力にまで忤えてしまう程に、水滴の質量が微さいのである。霧雨ではなく、ただの霧なのかもしれない。
何の明かりか判らないけれど、ところどころからサーチライトのように侵入し無明を蝕んでいる光の中にだけ、細かい水の粒が蠢いて見える。
プランクトンのようだ。
気持ち悪い。半端に照らさないで欲しい。暝いなら暗いままの方が好い。水滴は浮いてしまう程小さいというのに、そして多分透き通ってもいる筈なのに、お節介な光の所為で白く光ったり影を生んだりしてしまうのだ。
布地の目よりも細かいのだろうに。
霧は衣服に浸透し、身体にまで至る。もしかしたら皮膚を通り抜け、体内に溜まるのかもしれない。だから体が重い。
心が重いのか。いや、そんなことはない。
心は、意外と軽いと思う。さっき全部吐き出してしまったのかもしれない。何もかも、本当に何もかも一度に失ってしまったというのに、自分はそれ程深刻な想いに駆られてはいないように思う。いや、すっからかんに失くしてしまって、中身は空っぽのスカスカなのだから、重い訳もないか。
そんな風にも思う。

そんなだから。
――だからヒトでなしなのか。
そうなのだろうと思う。
娘は可愛いと思う。今でも思う。顔やら何やら思い出せば愛おしく思う。でも、それだけだ。どれだけ愛おしく思ったところで、いったい何ができるというのか。
可愛いからといって、朝から晩まで眺めている訳には行くまい。
もし二十四時間眺め続けていたならば、それはそれで狂気の沙汰だろう。
だから、まあ忘れている時だってある。邪魔に思う時だってあるだろう。
生きて暮らしているんだから。
でも。
朝から晩まで眺めずに済むものであるならば。
全く見なくたって済むのじゃないか。
一緒だよ。
・――気持ちは変わらないさ。
丸一日顔を見なくたって平気だ。だから多分、もう一生会わなくたって平気なのだ。そうじゃないのか。
そうじゃないらしい。
突然轟音を発して電車が通過した。
線路なのか。
この金網の向こうは。

遠くに幾つも光源がある。俺は半分だけ遠い明かりに照らされている。そこだけ霧が舞っている。厭なものだ。
湿っている。
歩みを止め、金網に指をかけて線路を覗き込んだ。霧雨が立ち籠めているから、まるで大昔の映りの悪いテレビのように安っぽい景色に見える。
何も考えずに暫くそうしていた。
金網に溜まった水滴が指先に移って滑り落ちる。
つうっと。
冷たい。
取り敢えず、生きてはいる。
――それだけだけどな。
死んでいないというだけだ。
離婚届を突き付けられた時は、目の前が真っ白になった。真っ暗ではなく真っ白だった。頸と、顳顬に血が巡るのが判った。血圧が高くなったのだろうか。どくどくという心臓の鼓動に同期して、身体の細部が脈打った。
そうした、体調のようなものはよく覚えているのだけれど、その時に何を思ったのか何を考えたのか、俺はあまり覚えていない。
何も思い付かず、考えてもいなかったのかもしれない。
そんな男だ。
自分が正しいとか、間違っていないとか、そんなことは思っていない。

妻が——妻だった人が悪いとも思わない。間違ってもいないと思う。
聞くだに、彼女の言い分は尤もだと、そう感じたからだ。彼女の言う通り自分は無責任で、冷血漢で、自制心に欠ける屑なのだろう。掛け替えのないものを失っても如何とも思わぬ、無神経で鈍感な人間なのだろう。いや——。
——ヒトでなしか。
否定はしない。できない。
でも。
では——自分の何処がそれ程いけなかったのか、そこのところが判らない。
彼女の言い分は尤もだけれど、それが何だと、何処かで俺は思っている。
実際あれこれ正しくもなかったのだろうし間違ってもいたのだろう。
でも、それが何だというのだ。皆はそうじゃないのか。
例えば娘が死んで悲しかったら——。
自分も死ぬのが普通なんだろうか。泣こうが喚こうが死人は帰って来ないじゃないか。何かしたら生き返るというなら、何だってやるさ。
何をしたって。
どう過ごしていたって。
死んだ者が生きて戻ることは決してないのだ。
時間は行きっ放しで、巻き戻せるものではないのだ。悲しくたって辛くったって飯も喰うし糞もする。それがいけないことなのか。悲しさというのは全人生を捧げるようにして表さなくては表現できないものなのか。

そうなのか。
——俺も死ねば良かったのか。
いや。
そういう問題ではないのだろう。それくらいのことは解っている。俺のコミュニケーション能力が低いというだけのことだ。
伝わらなかったのだろうきっと。俺の気持ちなど何ひとつ伝わらなかったのだ、妻だった人には。敢えて汲みたくなかっただけかもしれないが。
両方なのか。
俺だってあの人の気持ちが解っていたのかどうか怪しい。解ろうという努力はしたつもりだが、解っているという驕りもあったかもしれないし、よく判らない。
元気出せよとか乗り越えて行こうよとかいう、歯の浮くような台詞しか思い浮かばなかったし、そんな常套句みたいなことしか言えなかった俺は、蔑まれたって仕方がないだろう。
気の利いたことなんか言えるか。
俺だって、もうどうしていいか判らなかったんだから。そんなことはあの人だって解っていただろうに。
ならば何がいけなかったのか。何が決定的な過ちだったのかが、判らない。
自分だけが。
自分だけが一方的に悪罵を浴び、物を投げ付けられ、汚物のように見下げられ、蔑まれ疎んじられなければならないのかその理由が解らない。自分だけが悪かったという自覚も俺にはない。
そこが駄目なのかとも思う。

お互い様だと思っていた。その辺りが甘っちょろいということか。
甘っちょろいのだな。
金網から手を離す。
がたごとと音を立て、背後から逆向きの電車が通り過ぎた。車窓に何人もの他人の顔が見えた。
向こうからも見えただろう。
――俺は。
奴等にとって俺はただの景色だ。
電車に乗っている他人達にしてみれば、右から左に流れて行くだけの電柱と変わりのないものだ。人格を持った人間ではないだろう。いや、ゴミみたいなものでしかない。ほんの。
一秒か二秒だから。
それなら、人と思われなくたって仕方がないだろう。でも。
あの人とは八年も暮らした。
八年の歳月が、それこそ一瞬のうちに一秒か二秒と同じスケールになってしまったのだろうか。
鈍鈍と歩き出す。
家族のために。
下の娘が亡くなったので。
妻が大いに動揺しているので。
家族が壊れてしまいそうなので。
勿論、忌引は普通にある。多少長引いたとしても、多分一週間や十日なら有給だの何だので賄えたのだろうが。

一月半は――ない。
一箇月以上空けて、戻れたところで居場所はない。そういう仕事だ。
働きたくなかった訳ではない。仕事は、できる方ではないが嫌いではない。不器用だから失敗することも多いが、少なくとも厭だと思ったことはない。
只管愚直に務め上げるのだけが身上と、ただそうして生きて来た。生きて来たつもりだ。
目立った業績が上げられないならば、際立った活躍ができないならば、せめて怠惰にだけは過ごすまいと、そう思っていたのだが。
――意味がなかったか。
ない。
そんなものは要らない。会社にとっては必要のないゴミ同然のものだろう。
クソ真面目に、休まないのだけが取り柄だった使えない男が出社さえしないのだから。そんなものはもう、雇い主にしてみれば無価値なお荷物でしかなかろう。
幾度も勧告があり、その度に死ぬ程辛い思いをして釈明をした。すいませんすいませんすいません。妻が妻が妻が。家が家が家が。
甘えるんじゃない。
馬鹿野郎いい加減にしろ。
ずっと家にいればいいだろう。
最初は同情し、電話口で涙声まで出してくれた上司が、葬式で力を落とすなと励ましてくれた同僚が、最後には口汚くそう怒鳴った。
まあ、自分が彼等の立場でもキレるような気がする。

そこまでして休みを取ったというのに、家に居る間中、職場が気になって仕事が気になって仕方がなかった。落ち着かなくて、背徳くて、何だか怖くて、気も漫ろになって――。
悲しかったのに。
だから。
――悲しく見えなかったのか。
そうかもしれない。
そんな想いまでして、その結果俺は解雇された。不当解雇ではない。それはきっと違う。法律上はどうなのか判らないけれど、あの会社はそんな余裕のある会社じゃないのだから、ぎりぎり最大限の猶予をくれたのだ。俺はそのぎりぎりのラインを破ってしまっただけだ。
明日いっぱい待つ。限界だ。
そう言われた。
仕事に行くと言うと、このヒトでなしと言われた。あの時、最初に言われたのだ。取り繕って、言い訳して謝って頼み込んで、それで俺もキレた。
喧嘩になって、掴み合いになって。
上の子が泣いた。
――何をしてるんだ俺は。
謝って、頭を地面に擦り付けて謝って、それでも許しては貰えなかった。
仕事には行かなかった。
鼓になった。
俺は職を失った。

娘が死んだ所為じゃない。俺は仕事を抛ってまで、妻の機嫌を取りたかっただけだ。そしてそれも失敗したのだ。
許しては貰えなかった。
許して――。
――許して貰う？
俺が何をしたというのか。何故謝らなくてはならないのか。何か罪を犯したというのか。
浮気したとか、ギャンブルに溺れたとか、一方的に暴力を振るい続けたとか、それなら仕方がない。逆に、何もしなかったというのであっても、それは責められるべきことかもしれない。
そんなことはない。
俺の中でまた憤りが膨らみ始める。衣服は、もうすっかり濡れそぼっている。霧雨も小雨に変わっている。髪の毛も濡れている。滴が次次に額を頬を伝う。泣いていたって判りやしない。
「馬鹿野郎」
声に出す。
誰もいない線路脇の汚い道で、俺は漸く悪態を吐くことができた。妻だった人の前では最後まで言えなかった言葉を、水を含んだ虚空に吐き散らす。
「馬鹿野郎。いい加減にしろよ」
死ねよ――と口にして、そして俺は萎えた。
――そんなこと言うなよ。
自分。
そんな風に思ってないだろう。

胃に穴が空く程に思い悩んで堪えて努力したのは誰のためだ。妻だった人に、そして娘に、家族に好かれようと思ってしたことではなかったのか。

――いや。

いいんだろう、もう。

皆、去ってしまった。妻も娘も、ここにはいないし、もう会うこともない。

職場も家庭も何もかも、俺にはない。

我慢することもない。

何を言ったって聞こえやしない。叫んだって怒鳴ったって届きやしない。

絶対に届かない。

耳許で、息が掛かる程近くで、誠心誠意語ったというのに、蜿蜿（えんえん）と語ったというのに、何も届かなかったんだし。

その結果がヒトでなしだったのだし。

怠惰でいい。

不誠実でいい。

もう、それでいい。どんな不心得者になろうとも、どれだけ自堕落になろうとも、構いやしない。俺はもう誰にも繋がっていないのだから。

肩の力を抜いて。重力に任せるように両手をだらりと下げて。大きく息を吐き出すと、少しだけ腹筋が痙攣（けいれん）した。震えているのか俺は。

「死ねよ」

小声で言ったらすっとした。

妻だった人のことは考えていなかった。誰に向けて言ったのでもなく、いやそれは多分、自分に向けて言ったのだろうと思うが。

気が抜けた。

そのままふらりと右に折れて跨線橋の階段を上る。

もう帰る家はない。所持金も殆（ほとん）どない。何もかも処分してしまった。そうしなければ離婚はできなかった。

条件を付けられた訳ではない。争ってもいない。そんな気力はなかった。親権は譲れないとだけ言われた。当然――なのだろう。妻だった人が要求したのはそれだけだった。

養育費も要らないと言われた。今後一切の縁を切りたいから経済的な援助は遠慮するということだった。

援助はしたくてもできないだろうし。

妻だった人は、弁護士事務所に務めていたこともあり、そちら方面の知識も豊富にあったし、多分ブレインもいたのだろう。代理人も立てず、事務処理的な諸手続きは総て彼女本人がするということだった。俺は蚊帳の外にいろ、という意味だろうと思った。

いや――そもそも俺にできることなど何一つなかっただろう。する気もなかったし、する気があったところでややこしいことは解らない。

当事者である自覚は持てなかった。

だから裁判やら何やら、そうした面倒なことは一切しなかったのだけれども、何だか清算だけはしなければいけないような気がした。財産総てを処分して借財を返済し、残りを等分に分けることを提案した。

自暴自棄だった訳ではない。もう後戻りはできなかったし、ならば潔くする方がいいと考えたのだ。気が済まぬからだらだら養育費を渡し続けたいというよりも、多少マシな気もした。

でも。

分ける程残らなかった。不甲斐のない話である。笑うに笑えない。

家計を遣り繰りしていたのは妻だった人なのだから、彼女はその結果を予め承知していたのだろうと思う。でもこれ以上何か言われるのが厭で、というよりも事態が拗れるのが怖くて仕様がなかったから、僅かな退職金を慰謝料の名目で丸ごと渡すことにした。

全額現金化して封筒に入れ、慰謝料と書いて渡した。

適当だ。こんな適当なことでいいのかとも思ったが、他に渡し方を思いつかなかった。税法上どうなるのか判らなかったが、まあ後は勝手に何とかするだろう。

念書を書かされ、捺印した。

妻だった人にも、子供にも、二度と会わない。近づかない。電話もメールも一切しない。

まるで。

罪人だなと思った。

でも、俺は判を捺した。自分がヒトでなしだと認めたのだ。

肚も立たなかった。

悲しくも寂しくもなかった。

離婚届に判を捺した時よりは、ずっとショックが少なかった。慣れた訳ではなく、何だかもう如何でも好かったのである。

それじゃあ、と言った。

最後の言葉にしては随分と間抜けなものだが、未練たらたらの美辞麗句を並べるのは厭だったし、捨て台詞を飛ばす程の勢いは、もう俺にはなかった。

立会人もいなかった。

上の子は誰かに預けたのだろう。買い手の決まっている他人の家で二人きりの会見だった。俺はずっと床を見ていたように思う。視線を動かすと、八年間の想い出の滓みたいなものが飛び込んで来るような気がしたからだ。今更そんなものは要らない。

床にもそれは染みていたのだけれど。

妻だった人は最初から最後まで一言も口を利かなかった。

つまり——八年間の結婚生活を締め括る会見で発せられた言葉は、俺が発したそれじゃあ、の一言だけだったことになる。

滑稽だ。

それで、何もかも終わった。

俺は階段を上る。

地表から離れる、上昇するというのは、それだけで心地良いことだ。少なくとも、羽を毟られ地べたを這い廻る術しかなくなってしまった虫螻蛄のような今の俺にとっては、そうだった。

別に景色が変わる訳ではないのだが。

雨は、いつの間にか本降りになっている。ただ、音は余りしない。雨粒は静かに、糸を引くように落ちて来る。

寒いのだろうか。

そうでもないのか。

この間まで風は身を切るように冷たかった。その頃だったら、確実に風邪をひいていただろう。
こんなに濡れているのだ。流石に凍死することこそないだろうが、まともでいられなかったことだけは間違いない。幸い、季節は移っている。
もう、そんなに寒くない。
それとも感じなくなっただけなのだろうか。色色投げ出してしまえば人は何とかなるものなのだ。不快も、拒否しているうちは上っ面を撫でるように人を苛立たせるが、呑み込んでしまえば何ということはない。
水中にいる者は己が濡れていることを意識しないだろう。不幸せというのは、幸せという陸に上がっている者のみが感じることなのだ。
——もう。
快も不快も幸も不幸もない。
俺は笑った。
単なる自虐だ。開き直りだ。何とでも言え。何だっていい。自堕落に後ろ向きに、思い切り不真面目に。不道徳に。反社会的に。
誰も文句は言わないだろう。顔を顰め、唾を吐き掛ける者はいるかもしれないが、俺はもう何とも思わない。
恥や外聞や自尊心や、そうしたものが擦り切れてしまっているから。
ヒトでなしだから。
階段を上り切る。
でもフェンス越しに見る景色は代わり映えのしないものだった。

糸引く雨に闇が霞んで広がっているだけだ。決して行き着けないくらい遠くに、朦朧とLED
ライトのような光が明滅している。ビルか何かなのだろう。
雨が眼に入って、余計に滲んだ。
橋を渡る。
線路を越えたところで、それこそ何かが変わる訳ではないのだろうが、もう向こうへ渡るしかないだろう。
また電車が通過した。
眼の端に光源がちらつき、すぐに消えた。
俺の下を振動だけが過ぎる。
安普請の跨線橋は結構揺れる。古いのだろう。慥か、俺はこの橋を随分前に数度渡っている。
フェンスの接合部に赤錆が浮いていた記憶がある。鉄の塗装は剝げていて、コンクリートには罅が入っていた。汚い橋だと思った。
今は、雨と夜に紛れて真っ黒だ。
古くも汚くも感じない。この振動も却って好ましく感じられる。
——渡り切れば。
下りるだけである。
向こう側には同じような街が続いているだけだ。さて、どうしたものか。
宿もない。荷物もない。着替えすらない。必ずや困ることになるのは承知のうえで、何もかも処分してしまったのだ、俺は。必要最低限のものまで捨てたり売ったりしてしまった。住む場所が決められなかったから、送ろうにも送れなかったという事情もある。

無職の離婚男に部屋を貸す者などいないのだ。収入もないし、家族も保証人もいない。嘘はすぐにばれる。それ以前に金がなかった。家賃は疎か敷金も礼金も収められない。
住むところがないのに家財があっても困るだけだ。
安宿に一泊するくらいの金は所持しているけれど、その後がない。後というか、先がない。
働く気力が、そもそも俺にはない。
まあ、この就職難に気力だけあったところで意味はないだろう。土下座して頼み込んだところで雇っては貰えまい。資格がある訳ではないし、特殊な技能も持っていない。学歴も高くはない。年齢も、もう三十九だ。
何といっても。
弱小教材メーカーに殆ど縁故採用で入社して十五年、まるで出世はできず、十五年目にして出庫管理主任補佐にして貰った途端、長期欠勤で解雇された——役立たずである。
——ヒトでなしだしな。
それで納得し、泥だか雨だか判然としない足許から視軸を上げると。
妙なものが視界に入った。
橋の真ん中辺り。
フェンスに、何かが生えている。
白い固まりがへばり付いている。
何だか判らなかった。
丁度、羽化する途中の蟬のように見えた。蛻が割れて、白い、半透明の身体が半分くらい覗いている——そんな感じである。

勿論、蟬の訳はなかった。季節云云をいう以前に、それは巨きかった。一メートル以上あるだろう。そんな蟬はいない。いたら怪獣である。
——馬鹿馬鹿しい。
頭を振ると滴が散った。余計に眼に水滴が入ったので、手で擦った。
それはまだ見えていた。
白い——のだろう。
暗いし、雨も降っている。視認性は著しく低い。それでも見えているのだから、まあ白いのだろう。
少しだけぞっとした。
悪寒だ。雨で体が冷えてしまったのだろうか。怖いと思った訳ではなかったが、禍禍しいもののようには感じた。自分の中にそんな感情めいたものが残っていることが新鮮な気もした。
——厭だ。
あれは、きっと厭なものだ。
橋の幅は狭い。
人が擦れ違うのがやっとだ。
いや、田舎の吊り橋でもあるまいに流石にもう少し広いのだろうが、印象的にはそんなものである。
彼処に行き着いたとして。
触れずに通り抜けられるだろうか。もしかしたら触ってしまうのじゃないか。肩が当たったりするのじゃないか。

それは厭だ。
引き返せばいいことだ。ところが。
俺は引き返せなかった。先に進まねばならぬ理由は皆無なのだから、踵を返し階段を下ってしまったって一向に構わなかったのだろうに。
俺は前進した。
とても緩寛と。
幻覚であれば消える。消えずとも接触することなどない。
消えなかった。
ゴミ袋が引っ掛かっているようにも見える。捨てる衣類か何かをゴミ袋に詰めて、それをフェンスの金網に掛けたのではないか。だらしなく撓んでいるし、下の方でひらひらしているのは袋が破けて食み出ている襤褸布だろう。
残り三メートルまで接近し、俺はそれが動いていることに気付いた。
雨に打たれて揺れている訳ではない。
それは重力や雨の勢いに逆らって自律していた。
竦んだ。
ゴミ袋ではなかった。
細い鉤のようなものが二本突き出していて、金網に取り付いている。あれは——。
腕だ。
蠟細工のような腕だ。
白く見えるのは、濡れた衣服だ。その下に垂れ下がっているのは、多分スカートだろう。

女だった。
ぐっしょりと濡れた女が金網にしがみ付いている。闇に溶けていて見えなかったが、髪の毛もある。濡れてへばり付いている。顔は見えなかった。
再びぞっとして、すぐに思い直した。
酔っ払いだろう。
それ以外に考えようがない。見れば下にはバッグが落ちている。落ちた拍子に転げ出たのか、ピルケースやハンカチ、携帯電話らしきものも確認できた。
そんなものをぶちまける幽霊なんかはいないだろうから、これは明らかにこの世のものである。ただ、動作というか姿勢というか、状況が異常なだけだ。
痙攣するように、僅かな上下運動をしている。両足が下に付いていないところから見ても、上に登ろうとしていることは間違いないようだ。でも、登れないのだろう。
取り付いたはいいが、そこで止まってしまったのだろう。
跳んでしがみ付いたのだろう。しかし、取り付いたままの体勢で二進も三進もいかなくなってしまったのだ。どちらかの手を放せば落ちてしまう。しかし、放さねば上には行けない。下りるという発想はないのかもしれない。
酔っ払いだ。間違いない。
——厄介なことだ。
面倒臭い。
関わりたくない。
気が付かないでいて欲しい。

身体を横にして擦り抜ければいいだろうか。
酔っているなら気が付きはしまい。遣り過ごせばいいのだ。
どんなクソみたいな現実も遣り過ごせたのだから平気だ。こんな酔っ払い女なんか——。
乎。
ぐっしょり濡れている。
俺もだ。
厭だ厭だこんなのは厭だ。
これ以上堕ちることはないと思っていたのに、こんな気の狂れたものに行き合ってしまうなんて、どれだけ巡り合わせが悪いんだ俺は。
もう触れる程に近い。
俺は、俺が向けられていたのと同様の蔑みの視線を、女に向ける。
左手。
筋張った細い腕から伸びた五本の指がこれ以上開かないという程に開かれている。
懸命に摑まっている。やはりフェンスを登ろうとしているのだ。
——登ってどうする。
登って——。
乗り越える気か。
つまり、この女は死のうとしている——ということなのか。投身自殺を図ろうとしているのだろう。通過する電車の上に身を投げようとしているのである。
なんて面倒臭いシチュエーションだ。

でも、まあ乗り越えるのは無理だろう。この体勢では登れやしない。精精ひくひくして、落ちて終わりだ。
早く。
通り過ぎるしかない。
反対側のフェンスに身を寄せるようにして、できるだけ女から距離をとって、通り抜けようとした。
その時。
俺は何かを踏んだ。
靴の底に異物感が生じ、同時にぱりんと何かが壊れるような音がした。
咄嗟に視線を下げる。
俺はどうやら携帯電話を踏んだのだ。
壊してしまったか。
いや。
何だ。何か——見覚えのあるものが見えている。
俺が踏んだのは携帯電話本体ではなく、どうやらストラップのようだった。
いや、踏み割ったのは、ストラップ替わりに付けられていたキャラクターのフィギュアか何かだ。これは。
上の娘が持っていた——。
うあああッ。
耳許で、けもののような声がした。

顔を上げるのと頬に飛沫がかかったのは同時だった。見える筈の女の頭は見えず、続いて鈍い衝撃があった。
女が落ちたのだ。
選りにも選って俺が真後ろに差し掛かったその時に、こいつは手を放したのだ。
――巫山戯るなよ。
俺は反射的に飛び退いた。
女は尻餅をつくような姿勢でバッグの上に落ちて、そのまま前傾し、やがて貌を俺に向けた。
二十五六か。
着ているものはちゃらちゃらしているが、十代ではないだろう。アイラインかマスカラか、眼を縁取ったものが流れて、まるで黒い涙を流しているかのようだ。
恨みがましい目付きだ。
下から見上げるなら、誰でもこんな風に見えるものなのかもしれない。こいつの心中など知れない。
見ちゃいけない、と思った。
このままさっさと行けばいい。
俺は関係ない。こんな酔っ払いのクソ女とは何の関係もない。この女は、俺にとってただの景色だ。俺だってこの女にとっては雨や風と変わりのない、通り過ぎるだけの自然現象だろう。
目を合わせるな。
俺はまた下を向いた。足が竦んでいたのかもしれない。
俺は、壊れたフィギュアを見ていた。

「ああッ」
女は犬が吠えるような声を発した。
「邪魔しないで。ほっといてッ」
「邪魔？」
邪魔なんかしていない。邪魔してるのはお前の方じゃないか。お前が邪魔なんじゃないか。俺は――。
俺は何もしていない。
何をする気もない。
いや。
俺は、こいつと行き合わなくたって何もしていなかったのだ。
何処に行く気もなかったのだし、ならば何を邪魔されたというのだ。歩行の邪魔か。当てもなく彷徨っている屑の前に別の屑が落ちて来ただけじゃないのか。
「死ぬのか」
何を話し掛けている。
関わるな。とっとと行けと、俺の裡で俺が言う。
「死ぬのよ」
女は答えた。
「だから邪魔しないでッ」
「邪魔なんかしてないだろ。俺はここを通り抜けようとしただけだ。お前が勝手に落ちたんだろうよ」

言い返して来るだろう。そういうものだ。煩瑣いとか黙れとか、どっか行けとか、そういう意味不明のことを言うに決まっている。こんな奴とコミュニケーションなど取れやしない。どれだけ好意を寄せていても、どれだけ誠意を持って接しても、誠心誠意伝えようと努力したって、何も伝わらなかったじゃないか。

あんなに賢い、聡明な人でも、八年も連れ添った気心の知れた相手の筈なのに、何一つ通じなかったじゃないか。

俺は痛罵を浴びせられ軽蔑されただけだったのだ。

況てこいつは酔っ払いだ。前後不覚に酩酊しているのだ。動物の方がまだ話が通じる。どうせこいつも俺を敵視し、軽蔑して攻撃して来るに違いない。

――ヒトでなしだからな。

行けと言われたら行けばいいのだ。

しかし。

女は薄い眉を寄せ、眼を見開いた。

「そうなの？」

そしてそう言った。

「そう――だよ」

「止めたんじゃないの」

止めないよと言った。

「止めるもんなのかと思ってた」

「止めて欲しかったのか？　ならこんな人気のないところでやるなよ」

大体、死ぬ死ぬと言う奴は本気で死のうと思っていない。それは他人の気を引くためのパフォーマンスであることが多い。誰だって死ぬと言えば止める。嘘と承知していても万が一死なれては夢見が悪い。だから、死ぬ意思を顕示する者の多くは、止めて貰えるということを計算に入れている。

それは一種のお約束というか、歪つなコミュニケーションなのだ。かなり捩じ曲がってはいるけれど、多くの場合織り込まれたメッセージは通じる。

だから、普通の人間なら制止していたことだろう。でも、俺は。

ヒトでなしだから。

「悪いな。俺は止める気がない。止めて欲しいなら、どっか別の場所で死ぬ振りをしなさい」

「そうじゃないです」

止めて欲しくなんかないですと女は言った。

「振りでもないです」

――酔ってないのか。

いや、この錯乱振りは正常ではない。

素面でここまで取り乱すことなどないだろう。

「本気で死ぬつもりだったんです。でも、こういう場面に行き合ったら、止めるものなのかと思い込んでいたかもしれない。あなたは違うんですか」

「は？」

俺は壊れたキャラクターから女の顔に視線を動かした。

――ほんとに酔ってないのか。

「悪いけど、俺はさ、あんたとは関係ないから、あんたが何しようと知ったことじゃないし、口出す義務も権利もないから」
そうですね、と言って女は座り直した。そして俺の足許に目を遣った。
壊れたストラップを見ているのか。
娘が好きだったキャラクターだ。
俺が踏み潰したんだ。今。
「私、自意識過剰ですね」
女はそう言った。
「そういうことだ。まあ、死にたいなら死ねばいいさ」
死ぬ——か。
どうして考えつかなかったんだろう。
俺こそ、自殺してもおかしくないような境遇じゃないのか。冷静になって考えてみれば、俺が死んだって誰も不思議に思わないだろう。寧ろ納得するのじゃないか。
理由は幾つだってある。
愛娘に死なれ、職場を追われ、妻に遠ざけられ、家族も、家も、少ない財産も何もかも失くしてしまった。過去の想い出も将来の希望も現在の生活も凡て消え去ってしまったのだ。死を望んでも不思議なことはなかろう。どれかひとつだって死ぬ奴は死ぬだろう。
でも俺は、自殺という選択肢だけは持っていなかった。
そうは言っても、無一文に近い状態で雨の中をうろついている、明日をも知れぬ身ではあるのだ。だから、この先いつまで生きていられるか、そこは怪しいところではあるのだが。

生きていられなくなるかもしれないとは思うが、死のうとは思わない。
「何故」
何故死ぬ。
いや待て、俺は何を尋いている。
「死にたいから——です」
まあ、そうだろう。それ以上は俺に関係ない。どうせ失恋とかリストラとか、その程度のことなんだろうし。
大したことじゃないだろ。
「なら、あんまり見苦しいことはするなよ。通り掛かったのが俺じゃなかったら止めてただろうからな。あんたのいう通り普通は止める。いや、下手すれば警察か何かを呼ばれてたかもしれないな」
そしたらもう死ねない。
「それは——」
「まあ、余計なお世話だけどもな。それから」
俺は、女が摑まっていた金網の方を見た。
「こっから落ちたって死ねるかどうか判らないぞ。怪我するだけかもしれないな」
「電車が来ててもですか」
「ここは真ん中じゃないか。下は線路じゃないよ」
女は振り返る。
濡れて重たくなった髪の毛が水滴を散らしながら揺れた。

「線路だったとしても丁度良いタイミングで落ちなきゃ、轢かれたりしないよ。痛いだけだ。あんた、このフェンスさえ登れないんだぞ。そう上手いタイミングで飛び降りられるのか」
まあ、無理だろう。
「そんなに死にたいなら、どっかで首でも吊った方が確実だ。ビルから飛び降りたりしたら誰か巻き込むかもしれないしな。まあ、死んじまえば他人に迷惑掛けたって関係ないか」
何を喋っているんだ俺は。
女は泣いているようだった。
どうせこいつは死なない。
自分は本気で死にたいと思っているんだ——と、思い込んでいるだけだ。
何があったのか知らないが、そんな風に思い込んだ方が気が楽になるというのは解らないでもない。
被害者面をするのは楽だ。私は死にたくなる程可哀想なの、ほら可哀想でしょうと示す。誰かにそう言って慰めて貰いたいのだろう。
言って貰ったところで如何なるものでもないというのに。気休めだ。
要するに責任転嫁だ。
自分は苦しい自分は悲しい、こんな酷い目に遭ったこんな辛いことがあったと自分以外の誰かに知らしめることで、自己を正当化しているだけだ。
世の中は理不尽なものだ。
何もしていなくたって酷い目に遭うこともある。全く悪くなくたって責められることもある。
況て疚しいところが全くない人間などいない。

相手がクソなら、自分もクソだ。
そうとでも思わなければ——。
やってられない。
「私——」
生きてる意味ないんです——と女は言った。
——意味だ？
意味って何だ。
「馬鹿じゃないのか」
そんなもの。
「生きてる意味がない奴は、死ぬ意味だってないだろ」
「でも、意味がないなら——」
「意味意味っていい加減にしろ」
くだらない。
「大体、生きるの死ぬのに意味なんかないだろうよ。思い上がるなよ」
「思い上がるって」
「思い上がってるだろ。じゃあ意味がある人生って何だよ」
俺なんか。
ヒトでなしだ。
意味がないどころか、人ですらない。
人じゃないなら、人生もない。ただ生きているだけだ。生きているだけの屑だ。

「意味があるとかないとか言ってる段階で思い上がってるんだよ。そんなものはないよ。意味なんかない。みんな——」
ただ生きてるだけだ。
そうだろう。
そうじゃないのか。
俺だけがこんななのか。
女は縋り付くような視線を寄越す。
何だよ赤の他人のくせに。お前なんかに縋られるような謂れはないよ。全然ないよ。勝手に死ねよ。お前の生き死になんか俺には全然関係ないよ。
俺は——。
いいや、俺にとっては——俺以外の凡てが赤の他人だ。こいつに限ったことじゃない。
足許の壊れたストラップ。
俺が踏みつけてしまった、何とかいうキャラクター。
——何という名前だったかな。
思い出せない。娘が大好きだったキャラなのに。グッズか何かも何度か買ってやった。ねだられたんだと思う。
だから名前も聞いている筈だ。
一緒にテレビも観たじゃないか。
それでも。
覚えていない。思い出せないのではなく、覚えていないのだ、最初から。

興味がなかったのだ。
仕事で頭がいっぱいだったとか、生活を維持するだけでギリギリだったとか、そんな些細なことはどうでもいいじゃないかとか、そういう戯言を言い訳にはしたくない。仮令正論でも。
言い訳になってない。
些細なことじゃないのだろうし。
娘にとっては重要なことだ。そしてその娘は、大切な家族の構成員だ。家族は個人が寄り集まって得手勝手に暮らしている訳じゃないでしょうと妻だった人は言った。
その通りだろう。
自分自分自分って。
あなたは自分の都合ばかりね。
そうだ。
俺は、俺にできることしかできないのさ。だからお前の言う通りだ。
でも、お前だって同じだろ。
お前だって——。
いや、お互い様だから良いだろうという話ではない。駄目なものは駄目だ。
俺は、娘が、妻が、家族が好きだったし、それが掛け替えのないものだということも自覚していたし、大切に思ってもいたのだけれど、それでも興味を持てないでいたことは事実なのだ。どんな切実な理由があろうとも、駄目なものは駄目なのだ。
だから、妻だった人の評価では、俺の点数は零点以下だ。赤点どころかマイナス点の人間なのだそうだ。人間以下の点数というべきか。

でも俺の基準で計るなら、俺の点はそこまで低くない。なかった。勿論百点満点とは言わないが、五十点くらいにはなるのではないかと思っていた。
妻だった人にも非はあるだろうし。
あった筈だ。
俺よりは良い点なのだろうが、それだって百点ではないだろう。六十点か七十点か、もしかしたら俺と同じくらいかもしれない。
みんな——そんなものだろうと思っていた。自己評価は常に甘くなりがちだし、逆に他者に対する評価は厳しくなるものなのだろう。その辺をさっ引いたとしても、点をつけるならそんなものなのだろうと、それは今でもそう思う。完璧な人間がいないのと同じように、零点ということもないだろう。
五十点同士補い合えば、百点にもそれ以上にもなるだろう、くらいに考えていた。
楽観に過ぎた。
夫婦の場合、二人で二百点満点という勘定になるのだろう。俺が五十点で相手が五十点とすると、二百点満点の百点である。その程度のものだ。
夫婦でいるうちはそれでいい。
夫婦でいられなくなった時に。
その二人の持ち点は、どちらか一方のものになる。百点と零点に振り分けられてしまうのだ。
相手を責める時、責めている方は自分は百点だと思っている。そうでなくては攻撃なんかできない。俺は——だから妻だった人の失点も被っているのだ。そう考えるなら、まあマイナスにもなるかもしれない。責められている俺は、相手にとっては零点以下なのだ。

非はある——百点じゃないと認めた段階で、零点以下になってしまうのだ。
理不尽だ。
不当だ。だから、こっちも同じように考える。そう考えなければ間尺に合わない気分になるからだ。俺が百点だお前が零点じゃないかと言いたくなってしまうのである。そう言わないと対等には闘えない。そんなこと、まるで思っていないというのに、そう思いたくなってしまうものなのだ。
これでは妥協点は見出せない。
決して交わることはない。平行線だ。
罵り合い、蔑み合うしか道はないだろう。
厭なものだ。
そもそも、闘うという言葉で表すしかない関係自体が間違っているのだ。
別に闘うことなんかない筈だ。
そんな関係は、どれだけ体力があったって長く保つものじゃない。鰡の詰まりは破綻する。刃傷沙汰になるか裁判沙汰になるか——それは合法非合法の差こそあれ、同じことである。
正しいとか間違っているとか。
優れているとか劣っているとか。
そういう価値基準は、夫婦のような関係性の中に於ては、指針程度にしかならないものだ。割り切れないものを無理に割っても余りが出るだけなのだ。
だから。
呑み込むしかない。

両方良しとするか、両方駄目とするしかない。
俺がクソだというのなら、お前もそうだろう。クソがクソにクソと言われたって肚は立たない。
そんなことを――。
どういう訳か俺は考えていた。
見ず知らずの女の顔を見ながら。
女もまた、そんな俺の顔を見上げていた。雨と泥とでぐちゃぐちゃだ。
「私――」
死ねないでしょうかと女は言った。
「知らないよ。死ねないんなら、それは死にたくないってことだろ」
「死にたい――んです」
「なら死ねよ」
知ったことじゃない。
「どうやったら死ねるかとか尋かないでくれよ。俺はあんたとは何の関わりもない、ただの通りすがりだ」
お前のことなんか知りたくないよ。
俺は女に背を向けて、何かを振り切るようにして先に進んだ。
雨足は益々強くなっている。
もう、ただの雨だ。どしゃ降りの一歩手前だ。こんなに降っているのに傘を差していないなんて、あり得ないだろう。雨宿りさえしようとしないなんてあり得ないだろう。俺は、早足にさえなっていない。

突如、足の下を電車が通過した。振動と、雨音と、暗闇と、水滴と。
俺は何故か振り向く。
女が死んだと思ったのか。
そんな訳はないのだ。
女はまだ座っていた。
散らばったバッグの中身を拾い集めているのだろう。俺の踏みつけた――。
――あれは。
何というキャラクターなのか。
沢山の雨粒の向こう、女は携帯電話を手にして壊れたストラップを眺めている。
悲しいか。
お前もそのキャラが好きなのか。
大事にしなければいけないのは、そういう瑣末な日常なのだ。大義名分だのプライドだの意地だの正論だの、そういう偉そうなことに拘泥すると、時にもっと大きなものを失うことになるのだから。
――踏んで悪かったな。
そう思った。
他のことは如何でも好かったのだけれど、それだけは本気でそう思った。
でも壊れたものは戻らない。弁償する余裕もない。そもそも死のうとしている人間に無駄な装飾品を買ってやるというのは、馬鹿げたことだ。
前に向き直る。

もう、橋は終わる。後は階段を下りるだけだ。あの、汚らしい地べたに戻るだけだ。自分には似合いの場所だ。
のろりと身体の向きを変え。
俺は最初の段に脚を下ろす。
古い橋には側溝も何もないから、落ちた雨水はそのまま重力に諾諾と従い、階段を流れ落ちて行く。
泥水が跳ねる。まるで水溜まりに嵌まったかのようだ。
水を吸った古い革靴は非常に不快だ。踏み締めると雑巾を絞ったような音がする。踵の方から汚水が浸入し、靴下までが水浸しだ。
俺は眉根を寄せ、その顔のまま。
もう一度女を見た。
女は立ち上がっていた。
意外と背が高い。
——どうする。
酔っているなら、同じことを繰り返すだろう。また金網に飛び付く筈だ。
そうでないなら——。
どうするだろう。
片足を下ろしたまま、俺は止まった。
女は暫く脱力したように立ち尽くしていたが、やがてふらふらと揺れながら俺の方に近づいて来た。

——来るなよ。
俺は女から顔を背け、階段を下りた。
六段目まで下りたところで声が聞こえた。
あの——とか、その——とかいうよく聞き取れない呼び掛けだ。
雨音の方が余程クリアだ。
——煩瑣い。
不幸振りやがって。お前がどんな目に遭ったのか知らないが、お前が不幸だというならば、きっと俺はもっと不幸だ。そういうことになるだろう。
いや、不幸自慢をしたい訳じゃない。
俺は。
俺は別に不幸なんかじゃない。
お前に不幸振られると、そしてそれを認めてしまったなら、俺は。
不幸ということになってしまうじゃないかよ。
「待ってください」
女が降りて来る。
どうせ失恋したとか失業したとかそういう話なんだろう。死にたいんならさっさと死ねばいいじゃないかよ。その程度のことで死にたがる奴は。
「待って」
「何だよ」
俺は振り返った。

ここで女が足でも滑らせたりしたらいい迷惑だ。怪我をされても、死なれても迷惑だ。それで死ねたなら、この女は本望かもしれないが、俺は困る。
巻き添えを喰うのは真っ平ご免だ。
女はすぐ近くにいた。
目が合った。こんなに近くで人間を見るのは、何だか酷く久し振りな気がした。
女は一度眼を見開き、それからすぐに俯いた。
「ご、ごめんなさい。その」
酔っている訳ではないようだ。それともこの雨で正気に戻ったのか。
「何だ」
これを、と言って。
女は右手を突き出した。
「すいません。これ――」
「これ？」
折畳みの傘のようだった。
バッグに入っていたものか。
「これ――が？」
「その、傘をお持ちじゃないですよね」
「持ってないさ。俺は何も持ってない」
宜しければ使ってください――と女は言った。
「あんたは」

「私は」
死ぬからいいという話か。
「私はこんなに濡れてるし」
「俺の方が濡れてるだろ。それに借りたって返せない。俺も」
いつまで生きていられるか。
大体、俺はこれから何処へ行くんだろう。今夜は何処で寝るんだろう。この濡れ具合じゃネットカフェや漫画喫茶にも入れて貰えないのじゃないか。
このまま雨の中を何処までも彷徨して、朝になったとして、明日はどうするというのだろう。
女は傘を突き出したまま突っ立っている。
態は大人だが、仕草はまるで中学生だ。
「あのな、あんた。俺が誰だか知らないんだろ？　今さっき出会ったばかりで、どんな男か判らないだろうよ。そうやって簡単に関わり合うもんじゃないだろ」
悪い人間だったら如何するんだよと言いかけて、俺は言葉を呑んだ。
悪い人間だったら、などという物言いは、自分が良い人間であるという前提の下に発せられるものだろう。
良くないから。まるで。
ヒトでなしなんだから、良くないだろう。充分悪いじゃないか。悪いというより駄目なんじゃないか。
「他人から親切にされるようなマシな人間じゃないんだよ俺は」
女は無言だった。

「あんたにだって何もしてない。礼を言われるようなことは何もしてないだろう。それとも」
哀れみなのかこれは。
こいつから哀れみを受けるような謂れはない。こんな、見ず知らずのイカレた女の目から見ても、俺は腐って見えるのか。
何があったか知らないが、ただ錯乱して雨の中自殺の真似ごとをしているような屑よりも、俺は下か。
下だろうよ。
――それは。
僻みというものだろうが。
そんなことは解っている。でも僻んではいけないなんてルールは、今の俺にはない。関係ない。どうせヒトでなしなのだ。僻みたければ僻み、嫉みたければ嫉む。卑小で、下劣なのだ。
巫山戯るなよと言った。
「俺は物乞いじゃないんだよ。どこまで思い上がってるんだお前」
「私は――別に」
別に何だよ。
「それとも何か、俺の気を引きたいのか？　行きずりの男引っ掛けてどうすんだよ。そんなだから男に騙されたり捨てられたりするんだ」
「私――」
そんなじゃありませんと女は小声で言った。
震えている。

多分、その通りだろうと思う。この女には悪意も下心もないのだ。俺は、穿った見方をしている。間違いなく偏見を持っている。見下されるのが厭だから先に見下しているだけだ。
「どんなでもいいんだよ。知らないから。お前のことなんか。あっちに行けよ。さっさと死ね」
俺は傘を押し返すようにして、乱暴に腕を振り、そのまま階段を下った。
地面に着く少し前に振り返り、
「早く死ね」
と――。
最悪の捨て台詞を発した。
女がどんな顔をしていたのか、どんな風に立っていたのか、どんな気持ちになったのか、そんなことは一切解らなかった。
きっと。
無茶苦茶厭な気持ちだろうさ。
構うものか。
どうせ――死ぬのだろう。
死ななかったとしても死にたくなるような気分だったのだろうし、ならば今更何を言われたって如何ということはないだろう。
――死にたいなんて。
どうやったらそんな気持ちになれるのだろう。
女が追って来る様子はなかった。
いや――雨の音に遮られてしまっただけかもしれない。

雨は更に勢いを増している。こうなるともう夏の夕立に近い。夏でもなければ夕方でもないのだが。だから、この雨に紛れてこっそり付いて来ていたとしても、判りはしないだろう。
――そんな訳があるか。
追って来る訳がない。
俺を追う動機がない。
何処まで行っても景色が変わらない。
左側にあったフェンスが右側に移っただけである。雨も一向に止む気配がない。
時間も判らない。
突然、視界が歪んでしまったかのような錯覚を覚えた。
急勾配の下り坂なのだ。
元元低地の街なのに、まだ下があるのか。
坂を下る。足許が悪い。
足の運びが慎重になっている。こんなに零落(おちぶ)れてもまだ転ぶのが厭なんだろうと思うと、少し可笑しかった。
この期(ご)に及んで転ぼうが寝転がろうが構わないだろうに。既に水に落ちたように濡れそぼっている。もう、下着まで水が染みている。
ただ線路を渡っただけなのに。
――まあ。
汚れるのも濡れるのも平気だが、痛いのは厭だ。奇妙なものである。
痛みを忌避(きひ)するということは死にたくないということなのだろう。俺は死にたくないのだ。

あの女とは違う。
坂を下り切ると、車道が見えた。
車道は明るい。
車道と交差する線路は高架になっている。俺は高架下に出た。
鉄材の端から雨垂れが絶え間なく落ちて来る。俺は身を縮め、屈んだ。
恥も外聞もない。と――いうより人通りはない。人目を気にするまでもない。
看板の明かりが見える。
見たところまだ日付は変わっていないようだった。大した根拠はないのだが、車道を流れる街の空気がそれを告げているような気がした。
――それにしても。
二十三時過ぎだとして、もう五時間近く逍遥(しょうよう)していることになる。
それでも疲れたという感じがしない。
感覚が麻痺しているとか、肉体が強くなったとか、勿論そういうことではない。この先休むことなどできないのだと知っているからだろう。
もう、戻るベッドはない。
昨日まではウィークリーマンションを借りていた。一箇月の契約で、昨日が契約の最終日だった。延長はできなかった。無理を言えばできたのかもしれないなとは思う。でも、しなかった。
暫く屈んでいたら、落ち着いた。
別にこれまで落ち着いていなかったという訳でもないから、その表現は少し違うのだろうけれども、何だか視界が安定したような、そんな気になったのだ。

要するに移動するのを止めたということか。それに、雨に濡れてもいない。
そうして眺めてみて、俺は気付いた。
――この道は知っている。
知っているどころかよく通る国道ではないのか。我が家から――いや、我が家だった処から車で何処かに出掛ける時は、必ず通った道ではないか。
立ち上がり、歩道の端まで進んで左右を観た。間違いない。
――馬鹿馬鹿しい。
歩き始めた時は、何処か遠く、見知らぬ場所にでも行き着けないかと、漠然と思っていた。そうは言っても、徒歩であるからそれ程遠方に行けないことは承知していた。
だから、わざと迷うように、知らぬ道を選んで進んだ。横道があれば曲がり、細い径狭い路を選択した。
そうすれば、何処か見知らぬ場所に辿り着けるような、そんな妄想を抱いていたのかもしれない。
何のことはない。
隘路を五時間もかけて抜け、ずぶ濡れになって辿り着いたのは、起点から徒歩で二十分程の見慣れた場所に過ぎなかったということだ。
俺は少し笑った。
無為というか無駄というか、無意味にも程がある。
道路に背を向け、ガードレールのポールに浅く腰掛けるようにして、靴の中に溜まった水を出し、序でに靴下を脱いで絞った。

履き直すのは厭だったし、いっそ捨ててしまいたかったのだが、明日のことを考えるとそういう訳にも行かないだろうと思い、思案の末にポケットに入れた。
生きて行くというのは、無様で滑稽なものなんだなと俺は思った。
明日のことなんか考えなくて良いのなら、こんな不潔なものは即行で捨てている。
十分か、三十分か、判らないけれどそのくらいの時間、俺はガード下の道端に立っていた。
そのうち、雨は小降りになり、完全に止みこそしなかったのだけれど、傘を差さずにいても不自然ではない程度の空模様にはなった。
街は半端に澄んだ景色になった。
俺は高架の下からのろのろと出た。
車で通り過ぎるだけだった景色の中に俺はいる。この間まで、この景色はほんの数秒で過ぎ去るだけのものだった。でも、今は違う。俺は景色の中に定着している。
――そういえば。
この道を通る度に、同じ話題を繰り返しした覚えがある。
向かいに見えているコンビニエンスストアのその先の、交差点を左方向に曲がってすぐの、大きなマンションの最上階の――家賃の話題だ。
そこに、俺の高校時代の同級生が住んでいるのである。
荻野というその男は、大層羽振りが良いのだ。噂に依ればＩＴ関係の仕事で一山当てて、年収数億円だそうである。勿論噂だ。本人の口から聞いたのではない。口祥ない連中がやっかみ半分で言い触らしているのを耳にしただけである。いかにもありそうな話だったが、本当のところは判らない。

ただ、荻野が高級そうなマンションの最上階に住んでいることは間違いない。噂では現金一括で購入したことになっていたが、流石にそれはないだろうと思った。
それで、賃貸なら家賃はどれくらいかという話になったのだ。多分。
その頃――といっても明確にいつのことだったか定かではないのだが、とにかく荻野の家賃を口の端に上らせていた時分、妻だった人と俺との関係は迚も良好だったのである。
後部座席には二人の娘が並んで座っていたのだし。
都心という訳じゃないのだしそんなに高くはないだろう、いやそんなことはない、この辺りはベッドタウンだし駅からの距離を考えても相当の高額だろうと、俺達は埒もなく語り合った。
羨ましかった訳ではない。
寧ろ、揶揄していたのだと思う。
何をして儲けたのであっても、泡銭には違いないだろうよ、時節柄そんなバブリーな暮らしは如何なものか、大体あんな高級マンションに住んだところであいつは独身なんだぜ――。
俺にも、妻だった人にも、妬む気持ちが全くなかったという訳ではないだろう。
でも、結局は小馬鹿にしていたのだ。
俺には伴侶がいる。そして子供がいる。俺は、家族を持っている。あいつにはそれがない。家族は金で買えないだろうよ。
――それが拠り処か。
もうないよ。
くだらない張り合い方もあったものである。
そもそも、そうやって張り合うこと自体が浅ましい。

他人を見下げなければ己の足許が覚束ないのだろう。そして他人を見上げなければ、己の立っている場所が何処なのか判らないのだ。
見下げて見上げて、そうやって小動物のように臆病に、引っ切りなしに確認し続けなければ実感することができない幸福なんて。
――いいや。
それが幸福の本質かもしれない。
絶対的な幸福なんかないのだろう。
俺はふらふらと歩道を進み、横断歩道の前で止まった。向かいには煌煌と発光するコンビニの看板が見える。
学生時代、荻野とはかなり親しくしていた。親友というような痒い間柄でこそなかったのだけれど、多分一番長く、同じ時間を共に過ごした、仲の良い友人だったことは確かだ。
大学で離れ離れになり、それきり疎遠になった。ずっと、年賀状の遣り取りくらいしかしていない。
――だから。
俺の中の荻野は、濡れ手で粟の成金野郎などではなく、ただの冴えない高校生である。背は高いがひょろひょろに痩せた、走るのが遅い、ラジオばっかり聴いている、あんまり明るくない高校生である。
この道を家族で通った時の俺にとって、マンションの最上階に住んでいる荻野は、オギノという想像上のキャラクターのようなものだったのだろう。
友達でも何でもなかったのだ。だから小馬鹿にできたのだ。きっと。

下の娘が死んで。
荻野も葬式に来てくれた。こんな近くに住んでいるというのに、凡そ二十年振りに、俺は友人の顔を見た。
まるで懐かしくなかった。
誰だか判らなかった。
荻野は香典を十万円もくれた。それだけは覚えている。あの噂は強(あなが)ち的外れなものではなかったのかもしれないと、その時思った。
こいつは友達じゃない方のオギノなんだ——と。
そんなことはもう如何(どう)でも良くなってしまったのだけれど。
信号は中中変わらなかった。
エッジが滲んだコンビニの明かりを眺めているうちに、俺は自分が空腹であることに思い至った。
そういえば、今日はまだ何も口にしていない。水も飲んでいない。
日付が変わろうという頃合いになってやっとそこに気付くというのも間抜けな話である。
腹が減っていることさえ如何(どう)でも良かったというのか。それともヒトでなしはヒトでなしなりに、思い詰めていたとでもいうのだろうか。
いずれにしろ間の抜けた話だ。
寝床はなくても生きて行けるし、服が濡れていたって死にはしない。でも喰わねば確実に死ぬ。
俺は、死にたいと思ってもいないけれども、生きたいとも思っていなかったのだろうか。
——いいや。

そんなことはない。
何か喰おう、と思った。
一日二日断食したところで死ぬこともないとは思うが、喰いたくないなら兎も角も、喰いたいのなら喰うべきだ。
そのうち金も尽きるだろうし、そうなれば喰いたくても喰えなくなる。
信号が青に変わった。
俺は家族で通り過ぎるだけだった道路を、一人でよたよたと渡った。
汚らしい。
穢らわしい。
見窄(みすぼ)らしい。
自分の姿が硝子(ガラス)に映る。
こんな恰好で入店していいのだろうかと思案する。構うものか。客は客だ。
嫌がられたって嫌われたって知ったことじゃない。もう二度と来ない。
店内には数名の先客がいた。
店の制服を着た坊主頭にピアスのバイトが、床にモップをかけている。俺は雨粒を滴(したた)らせ、磨き立ての床を泥で汚しながら、レジの前を過ぎる。
レジの中の親爺の顔は、あからさまに嫌悪感を表現している。
握り飯がいい。
コンビニで喰い物を買うことは少ない。雑誌か新聞か、そういうものしか買わない。後は、精精缶コーヒーくらいしか買ったことがない。だから、かなり選ぶのに時間がかかった。

こんなに種類があるものと思っていなかったのだ。
これはやはり、握り飯ではなくオニギリなのだろう。誰かが握っている訳ではなさそうだ。味が想像できないようなものも幾つかあったが、結局鮭ばかり二つ買った。
財布も湿っていた。その中の硬貨はやけに冷たかった。小銭が沢山あったので、端数まできっちり支払った。
ホームレスか何かと思ったのだろうか。何と思われても構いはしないが、自分がいったいどのように見えているのか、その点だけには興味があった。
決して愛想の良い接客態度とはいえなかったから、まあ好かれてはいないことだけは間違いない。
レシートを玩びながら、早早に店を出た。
――また。
少し降って来たか。
雨の中で飯を喰う訳にもいかないだろう。ガード下まで戻ろうか。それともこの軒下で喰ってしまおうか。
ガサガサと袋から握り飯を出していると、慎吾、慎吾じゃないかという声が聞こえた。
何だか、隣の部屋で流れている再放送のテレビドラマの台詞が聞こえているような、凡そ現実感のない音声だった。俺は、もうまるきり他人事で、それを呼び声とさえ認識していなかったから、開け難いオニギリのパッケージの数字を見つつ、あちこち引っ張ったりしていた。
「おい。慎吾」
「あ？」

オニギリから視線を上げる。
荻野が立っていた。
自動ドアの真ん前なので扉が開き放しになっている。
「どうしたんだお前」
荻野はそう言った。
「お前って――俺か」
「お前だよ。お前、慎吾だろ。忘れたのか俺のこと」
忘れてはいない。
ただ、俺が覚えている荻野がお前なのかどうかは、よく判らないんだ。
「ここ邪魔だから、そっちに行けよ」
荻野は俺を追い立てるように、ドアの前から灰皿の処まで移動した。
厚めの生地のスウェットにビニール傘を持ち、サンダル履きである。
こいつは間違いなく荻野だ。
荻野だが、俺の知っている荻野じゃない。友達の荻野じゃなく、きっとキャラクターのオギノなんだろう。
ひでえなあとオギノ――いや、荻野は言った。
「何だよその恰好は」
「別に何でもない」
「何でもないってことはないぞ。何があったんだよ。おい、少しイカレてんじゃないのか？」
イカレてるかもな、と答えた。

「お前さ――」
荻野は憂鬱な顔になる。面倒ごとを抱えてしまったというような顔だ。
「まだ引き摺ってるのか」
「引き摺る？」
娘さんのことだよと荻野は言った。
「まあ一年やそこらで忘れられるもんじゃないかもしれないけどな。死んだ子の齢数えるような真似は止せ。残酷なようだがな、死んだもんはどうしようもないよ。余計なお節介かもしれないがな、その」
そんなことはしてないと言った。
「したくたってできない」
「どういうことだよ」
「どうって――俺はもう親じゃない」
今後一切関わりナシなのだ。そう書いて判を捺した。つまり、死んだ子の分の親権も、俺にはないのだ。哀しむ権利も懐かしむ権利もない。
同様に義務もないのだが。
「親権は――まるごと渡してしまったんだよ」
「親権？」
荻野は眼鏡の奥の眼を細めた。
――これは。
この顔は高校時代と同じ顔だ。

「離婚したのか？」
「した」
「いつだよ」
「先月だ。身辺整理して、念書書かされた。今日が調印式だ。五時間ばかり前に完全に縁が切れたよ」
荻野は昔の顔のまま、少し黙った。
「やっぱりその――娘さんのことが原因なのか？」
それは――どうなのか。
判らんよと答えた。
「何かしたのか？」
「俺が？　俺は」
何もしなかった。できなかった。
「さあな」
「で？」
「でって何だよ」
「何でずぶ濡れなのかって尋いてるんだよ」
「雨が降って来たからだ」
俺は再び夜天を見上げる。
ただ――暝い。
ふうん、と荻野は答えた。

「お前こそどうしたんだよ」
「俺はそこに住んでるんだよ。コンビニに来たっておかしくないだろ」
「そうだが」
そんな恰好でふらふらコンビニに来るような暮らし振りじゃないのじゃないか。金持ちなんだろうに。
俺の顔を眺め、荻野は一言、お前も俺のこと誤解してるなと言った。
「そうかもな」
「俺はな、お前の思っているような暮らしはしてないぞ。正直言って喰うや喰わずだよ。いや、借金塗れだよ。首吊ろうかってな具合だよ」
「そうなのか」
こいつも死ぬのか。
吊らないけどなと荻野は言った。
「俺の保険金を俺にくれるってのなら考えてもいいけどな。死んだら貰えないだろ。貰っても使えない」
「羽振り良かったんじゃないのか」
「浮き沈みの激しい業界なんだよ俺のいるとこはさ」
そう言って、荻野は肩を竦めた。
「お前は何だ。離婚してヤケでも起こしたか？　昨今バツの一つや二つで凹んでちゃ、やってられないだろう。慰謝料でもボッタくられたか？」
「慰謝料は払わない」

「そりゃ得だな」
「得か」
離婚を損得で計るという感覚も俺にはなかったものである。
しかし損得勘定をするのなら、離婚などという行為は端から論外だろうと思う。しないのが一番得だ。金銭に置き換えずとも、損だ。ただ只管に疲弊するだけだ。
「ほら、柔道部の、佐久間。あいつも一昨年離婚したんだ。で、慰謝料払ってカラッ穴になって、養育費も払えなくなって、止せばいいのに闇金抓んで焦げ付いて追い込まれてよ、破産だよ破産。今は行方不明だ」
「そうかい」
「お前は？」
「俺はお前と違って慎ましく日常を回していたからな。ただ、清算したら何もなくなった。破産することもできない。破産というなら今がそれだよ」
「家は」
「処分した。ローンがあったから」
「処分？　そのまま住めばいいじゃないかよ。慰謝料がないんだったらローンくらい払えるだろう。扶養分の生活費だって浮くんだし」
「解雇された」
荻野は黙った。
そして眼鏡を外した。
「仕事も辞めたのか。離婚と同じ時期にか？　リストラか？　何の会社だったっけ？」

「だから解雇だって」
不要だと言われたのだ。
「そりゃ難儀だが――でも、退職金でローン返すとかしろよ。何とでもなるだろう」
「ならないんだよ」
俺は荻野を睨んだ。
それはする気がなかったということだな――と荻野は言った。
俺は答えなかった。
答えようがない。
「まあ、色色あるんだろうな」
俺も同じだよと荻野は言う。
「実際、やってられねえ」
荻野は灰皿を軽く蹴った。
「あの」
昔の友人は顎を振って示す。
「マンションだけだ、今の俺にあるのは。まあそれもいつまで保つか――って話なんだけどな。あそこ売って借金完済できるなら、まあ、考えないでもないって話なんだが――足りない。全然足りない。足りたとしたって俺はお前と違って無一文から再スタートなんて、そんな潔い真似はできないしな」
「再スタート？」
「そういうことだろ」

スタートはしていない。俺は流されているだけだ。始めも終わりもない。
抗うのを止めただけだ。
争うのに疲れただけだ。
来るか、と荻野は言った。
「来るって？」
「お前、行く処ないんだろ。宿取ってるとも思えないぜ。俺にはな、家だけはあるんだよ」
「ああ」
あの、家賃の知れない最上階か。
どうやら賃貸ではなかったらしい。
「俺に親切にしたって何の見返りもないぞ荻野。俺は何も持ってない。所持金も僅かで、口座の残高も微微たるものだ。無一文に近い」
「お前に借金返してくれなんて思うかよ。そんなドブ鼠みたいな恰好してる奴に期待してないって」
ドブ鼠か。
「お前、やっぱりまだ勘違いしてるな」
「何をだ」
「卑屈になる気持ちは解るが、俺は僻まれるような立場じゃない。金の切れ目が縁の切れ目というヤツでな、女も逃げた。友達もいなくなった。詐欺師呼ばわりされて、仕事もなくなった。今や八方塞がりだ。屑だ、屑」
「お前がか」

屑なのか。
屑だよと荻野は言った。
「詐欺は働いてないけど詐欺紛いのことはした。勢いのあった時はな、他人を蹴散らして伸し上がったから、何人も泣かせた。泣いただけじゃなく、死んだ奴もいたかもな。面白かったぞ」
膨れることしか考えないってのは面白いもんだよと荻野は笑う。
「膨れてる奴ってのは萎むことなんか予測もしないんだ。でもな、膨れりゃ必ず萎むんだ。萎まなきゃ」
破裂だよと荻野は言う。
「ドカーンだ」
「景気がいいな」
「おう。そうならな。でも俺は——萎んだんだ。萎めば弱くなる。弱くなったら叩かれる。俺の場合袋叩きだ。周囲には敵しかいない。だからやった分きっちりやり返された。それだけのことだ。いや——倍返しかな。勢いがなくなりゃ喰われるだけさ。そうなったら目も当てられないぞ。ドツボだよ」
でも俺よりはマシだろう。そう思ったが口にはしなかった。
こいつの不幸はこいつが決める。それがどの程度のものなのか、他人には計ることができない。不幸だの幸福だの、そういうものは相対化することができないものなのだ。
俺は。
自分は如何だろう。
よく判らなかった。

ただ。
「お前が屑なら俺も屑だぜ。俺を助けたって一文の得もないことだけは確実だぞ」
「だから何の期待もしてないって。ただうちに暫く泊まったらどうだと言ってるんだよ。面倒みる気はない。みる余裕もないよ。昔馴染みの屑と屑とで傷を舐め合ってみようって気持ちの悪い提案だ」
寸暇待ってろと言って荻野は店内に入った。
あいつは——。
どんな奴だっただろうか。
高校の頃にもこんな感じで話していただろうか。いや——もっと他人行儀だったような気がする。そもそもあいつは、俺のことを慎吾と呼んだりしていなかった。他の連中はそう呼んでいたけれど、あいつだけは違っていた。
俺だって荻野君——と呼んでいたのではなかったか。
——何の話をした。
仲は良かったのだ。あいつはいつだってラジオばっかり聴いていて、精神世界系の本ばかり読んでいたんじゃなかったか。
世界の外側というのは、ないんだよ。
ないものをあるというのは、喩えだ。
喩えを本気にするのは、馬鹿だよね。
ないという形であるんだと知ること。
そこから始まる。

——何が。
何が始まる？
そんなことを言っていたと思う。覚えている。前後の状況は失われているが、断片だけはやけにクリアに記憶されている。
俺は、そんな話をされた俺は、いったい何と答えたのだろう。そんな話題を振られて、如何受け答えしていたというのだろう。自分のことは何も思い出せない。でも、会話が成立していたことは間違いない。
経験に依って得られる知識は偽物さ。
学校で教わることだって、同じだよ。
時代や環境に左右されるものだろう。
そんな知識は、真の智じゃないんだ。
本当の智慧は本質的に備わっている。
ここの中にね。
——ここって何処だ。
何処に備わっているというのか。
いや、何の話だったか、契機も文脈も、状況も、全く思い出せない。ただあいつの声や話し方だけは覚えている。
俺は何を尋いたのだろう。そして何と答えたのだろう。
思い出せない。
適当に話を合わせていただけなのだろうか。いや、そうなのだろう。

今だってそうだ。
俺はずっとそうだ。
他人に対して、自分以外の凡てに対して、俺は興味を持っていないのだろう。愛情も執着も未練も、それはないとは言わないけれど、突き詰めて考えれば如何でもいいのだ。
自分が痛いのは厭だ。
一方、他人の痛みは判らない。
娘が痛がるのは厭だが、それは痛みが判るからではない。自分も同じように痛い訳じゃない。心が痛いなどと謂うけれど、心なんか痛くない。ただ痛がっている娘を見ていると、楽しくない、面白くないというだけだ。
ただ、起伏のない日常を取り戻したいから、悲しい振り、苦しい振りをするだけだ。何処も痛くなんかない。
そういう性根は、きっと透ける。
本気じゃないということなどすぐに判ってしまうのだろう。妻だった人にもそれは判ったのだ。
でも、それは誰だって同じだ。
妻だった人だって同じだ。本当に痛い訳じゃない。本当に痛いんだと思い込めるかどうかだ。
俺は、思い込めなかった。
それだけだ。それだけなのだが、その差は大きい。天と地程に開いているだろう。
薄情者。
それでも親なの。
この——ヒトでなし。

ヒトでなしだ。
——俺だって。
思い込もうと努力はしたさ。
でも、自分で自分を騙すことができなかっただけだ。本当は痛くも痒くもないんだと、俺は気が付いてしまった。知ってしまえば騙すのは難しい。だから、俺は自分を騙さず、自分以外を騙しただけだ。
痛くないのに痛い振りをするのは不誠実だろう。でもしないよりはマシだ。
だから痛い振りをしていたんだよ。
娘のことが嫌いな訳じゃなかったから、家族のことが大事じゃない訳じゃなかったから、だから、そう見えるように、振りをしていたんだ。
——そんなのは。
バレるに決まっている。
だから高校生の俺も、きっと知ったか振りをして、調子を合わせていただけなのだ。
俺には——。
昔から、誠意という奴が備わっていないかもしれぬ。だから仕方がない。
荻野はすぐに出て来た。
袋を掲げる。ビールか何かを仕入れたらしい。
「元元飲みたくなったから酒買いに来たんだ俺は。考えてみれば一緒に飲むのは初めてだろ」
「ああ」
何もかも初めてだ。

「ところで慎吾。あの」
荻野はコンビニの袋で示す。
「道の向かい側。あれ」
俺は示された方を見る。
「ほら、あの、さっきからお前をずっと見てる女——ありゃ知り合いか？」
「え？」
目を凝らすと。
横断歩道の向こう、信号の下に。
あの女が。
あの、死に損ないが立っていた。
俺に差し出した折畳み傘を所在なげに差して。
今更傘なんか差したって、それこそ意味がないのだろうに。俺と同じくらい濡れている。泥だらけだ。汚らしい。
女は、慥かに俺を見ていた。
表情までは判らない。恨みがましく睨んでいるのか。
憎んでいるのか。
まだ死にたいか。
——違うな。
死ぬのは止めた、ということなのだろう。傘を差しているのだからそうなのだろうと思う。俺は何となくそう感じた。

死ねと言ってやったのに。
あれ、お前の女じゃないだろうなと荻野が問うた。
「俺の――って何だ」
どういう意味か本気で解らなかった。荻野は苦笑するように頬を歪(ゆが)めて、
「何だって何だよ。こっちが尋きてえよ」
と言った。
「関係があるか、という意味か」
「他にどんな意味があンだよ。浮気相手とかよ。もしやあれが離婚の原因だとか。それなら、まあ、俺はとんだ道化だがな」
「冗談だろ。それなら」
それなら。
もっとずっと話は簡単だ。
「俺に女気はないよ」
「そうか。いや。そんな気がしただけだけどな。だってあれ」
見ている。
「ほら。知らない人間をあんなにガン見するかよ」
「イカレてるんだろ」
あの女も。
俺達と同じ屑だ。
車が数台通り過ぎた。

「知らない女なのか？」
知らない女だ。
知らないよと答えて、信号が変わる前に俺は歩き出した。
おい、いいのかと荻野は言う。
「いいって？」
「あれ、知ってるか知らないか知らないけどよ、お前に何か用があるのじゃないのか？」
用なんかあるか。
「泊めてくれるんだろ。早く行こう」
あんな死に損ないとは関わりを持ちたくない。俺は足早になる。
信号が青になる前に。
お前なんか知らない。
お前みたいな知らない女のために何かの振りをするのはご免だ。いい人の振りも悪い人の振りもしたくない。何処か遠くに行ってくれ。それができないなら死んでくれ。死にたかったんだろう。俺の前から消えてくれ。
まだオギノの方が良いよ。
この男は、もしかしたらオギノじゃなくて荻野なのかもしれないし。
荻野なら友達だ。
お前は死に損ないじゃないか。
俺は死にたくなんかないし、死にたい奴の気持ちも解らないから。
――まだ見ているのか。

角を曲がって暫く行って。
ほんの僅か。
振り向いてみた。
信号は青になっていたけれど。
女はまだ同じ場所に立っていた。